

## 在外日本関係史料を基軸にした史料調査と研究資源化の研究

研究者所属・職名： 史料編纂所・教授

ふりがな ほうや とおる  
氏名： 保谷 徹

主な採択課題：

- [基盤研究 \(A\) 「在外日本関係史料の調査と貴重史料の研究資源化による維新史料研究国際ハブ拠点の形成」\(2020-2023\)](#)
- [基盤研究 \(S\) 「マルチアーカイバル的手法による在外日本関係史料の調査と研究資源化の研究」\(2014-2018\)](#)
- [基盤研究 \(A\) 「ロシア・中国を中心とする在外日本関係史料の調査・分析と研究資源化の研究」\(2011-2014\)](#)

分野：歴史学、日本史学

キーワード：在外日本関係史料、史料調査、研究資源化、デジタルアーカイヴ、幕末維新史

### 課題

#### ●なぜこの研究をおこなったのか？（研究の背景・目的）

東京大学史料編纂所は国内外の日本史史料の調査・収集に従事し、とくに1954年には諸外国に所在する未刊行史料（主に外国語）の調査・研究を日本学士院から委嘱された。マイクロフィルムで収集された海外史料は125万コマに及んだが、ロシアや中国、東アジア史料の調査は不十分であった。本研究では、基盤研究 (A) 「前近代東アジアにおける日本関係史料の研究」(2003-2006) を皮切りに、基盤研究 (A) 4件・同 (S) 1件を得て、これまで不十分だったロシア・中国史料の調査や欧米史料の補充調査を中心に、日本関係史料の調査・研究とデジタルアーカイヴ化を進めた。

#### ●研究するにあたっての苦労や工夫（研究の手法）

欧米の補充調査は、国立文書館など公的機関への出張調査を連年実施した。一方、ロシア・中国では、主要な史料保存機関（文書館）などと連携協定を結び、毎年のように国際研究集会を開催して現地から研究者を招聘し、現地機関や研究者の協力を得て所蔵する日本関係史料の情報を収集するところから開始せざるを得なかった。ロシアの旧都サンクトペテルブルクの諸機関との交流はすでに20年に及んでいる。20回を超える国際研究集会（日本学士院と共催）での報告にもとづき、出張調査を実施し、目録作成や史料画像の収集を積み重ねてきた。



図1 東アジア3国に関係するロシア国立歴史文書館所蔵史料解説目録の刊行（2020）

## 在外日本関係史料を基軸にした史料調査と研究資源化の研究

### 研究成果

#### ●どんな成果がでたか？どんな発見があったか？

〔デジタルアーカイヴ構築と公開〕欧米を中心に調査・収集した在外日本関係史料（海外史料）マイクロフィルム165万コマをデジタル化し、さらに追加調査や横浜開港資料館との連携公開による追加データ77万コマを合わせ、約20か国70機関から16～19世紀の日本関係海外史料計242万コマのデジタルアーカイヴを構築し、研究所の閲覧室から公開中（Hi-CAT Plus）。〔研究成果の刊行等〕著作・論文による成果公開に加え、ロシア国立歴史文書館が所蔵する史料の解説目録2件（2010・2020）、ロシア国立海軍文書館が所蔵する史料の解説目録2件（2011・2017）、さらに中国第一歴史档案館が所蔵する皇帝档案の整理目録（2010）などを刊行した。調査研究の成果は、歴史学研究会編『世界史史料』12・日本と世界（2013）や『山口県史』7・海外史料編（2014）に活用し、国立歴史民俗博物館におけるドイツ展示（2015）やハワイ展示（2019）・外務省主催の日露関係写真展（2019）への展示協力、港区立郷土歴史館における特別展「日本・オーストリア国交のはじまり」（2019）の開催などにつながった。高精細デジタルカメラによるオーストリア所在のガラス原板写真の調査成果は、古写真研究プロジェクト編『高精細画像で甦る150年前の幕末・明治初期日本』（2018）の刊行を生み、一連の活動が評価されて、メンバーである連携研究者谷昭佳が日本写真協会学芸賞を受賞している（2020）。〔ロシア・中国調査の成果〕中国第一歴史档案館や中国国家博物館との共同研究を実施し、後者は研究分担者須田牧子による倭寇凶像研究の成果を生んだ。ロシアとの共同研究の成果では、①1778年の松前藩文書や1806～7年の北方紛争関係史料群の発見などがあげられる。また、②調査・収集したポサードニク号事件（1861年の対馬芋崎占拠事件）関係史料を、基幹史料集『大日本古文書・幕末外国関係文書』に翻訳して収録し刊行を継続している（既刊53巻）。さらに、③研究分担者谷本晃久（北海道大学）によるアイヌ・北方史関係史料研究などで目立った成果があった。



図2 安政東海地震を描いたモジャイスキーのスケッチ画（部分、1854）ロシア国立海軍中央博物館所蔵

### 今後の展望

#### ●今後の展望・期待される効果

過去20年にわたり取り組んできた国際研究集会の報告論集を取りまとめ、ロシア所在日本関係史料情報を集大成する。日本人商人とサハリンアイヌとの交易帳簿（1806～7年）の史料集刊行、ポサードニク号事件を指揮したロシア海軍司令長官リハチョフの航海日誌（1860～61年）の翻訳・刊行を目指したい。南欧史料調査（研究分担者：岡美穂子）も期待できる。また、研究所が所蔵する我が国有数の貴重な幕末維新时期史料群のデジタルアーカイブ化に取り組み、幕末維新时期の基幹史料集「大日本維新史料稿本」（4200冊）の目録となる維新史料綱要データベース（約3万件）の英訳と基本用語の英訳グロッサリー研究（研究分担者：小野将）を推進して、維新史研究の国際発信と国際ハブ拠点化を目指している。



図3 サハリンアイヌとの交易帳簿（東洋古籍文献研究所蔵）